浜離宮恩賜庭園の歴史

この庭園は、1652年、将軍家の縁戚である甲府藩主松平綱重が下屋敷として四代将軍家綱から拝領したのが始まりです。敷地の大半が、浅い海で「甲府浜御殿」などと呼ばれていました。この敷地に隣接していたのが仙台藩伊達家の敷地で伊達家が62万石に対して、石高25万程度の甲府藩の方が、広い土地を拝領したのは納得がゆかぬという方もいらっしゃるかもしれません。でもそれはなぜか。歴史がお好きな方はお気づきかもしれませんが、この甲府藩の松平綱重という人物は、第三代将軍・徳川家光の三男で、第四代将軍・徳川家綱の弟という関係です。そして、生類憐みの令、犬公方として名高い第五代将軍・徳川綱吉の兄にあたる人物で、さらに第六代将軍・徳川家宣の父という、綱重がいつ将軍になってもおかしくない江戸幕府の中心を歩いていた人物でありますので石高25万程度でも25haという広大な土地を与えられたのも納得できます。広い土地ではありましたが、海に面した湿地帯ですからすぐには使い物にならなかった土地です。拝領した後、1707年に大規模な改修工事が行われ、庭園の北西部に、海水を引き入れた大池（潮入りの池）をつくり、橋（お伝い橋）を渡し、茶屋、観音堂、大手門などが設けられました。松平綱重の死後、6代将軍家宣（1709～1712）の時に名称を「浜御殿」とし、その後160年間将軍家の別邸として利用されました。家宣はこの浜御殿で天皇の勅使として江戸を訪れた公家たちを度々接待したようです。茶屋で池を見ながら和歌を詠み、池に船を浮かべ音楽を聴き、庭園内の水田で田植えの様子を見せたそうです。誠に雅な世界です。また、マツケンサンバ、暴れん坊将軍でおなじみの第八代将軍徳川吉宗の時代には、浜御殿の敷地を利用してサトウキビや薬草を栽培したり、狼煙の実験や西洋騎馬術の訓練を実施したりしたほか、中国の商人からもらった象を飼育した時期もあったそうです。歴代の徳川将軍の名前を思い出すときにはこの浜御殿のことを思い出してみるといいかもしれません。この「浜御殿」は、慶応3（1867）年10月13日、第15代将軍の徳川慶喜が「政権を朝廷にお返しする」と発表したいわゆる大政奉還と一連の明治維新ののちに「浜御殿」から「浜離宮」となり、明治2（1869）年に迎賓施設の延遠館が建設されます。その後、関東大震災・第二次世界大戦の空襲によって建築物はすべて焼失し、多数の樹木も損傷してしまいます。終戦直後の昭和20（1945）年に、東京都に下賜され翌年開園したのが現在の浜離宮恩賜庭園となります。